

おぼさりたい、だかさりたい

青森県

むかし、ある山の村に、三人の兄弟が住んでいました。一太郎、二太郎、三郎といいました。一番下の三郎は、村一番の力持ちでした。

村はずれの森の中に、光り物の化け物ばけものが出るといいうわさがありました。

あるとき、一太郎は、町へ使いに行つて、夕方おそくなつてもどつてきました。山道を歩いていると、森のかげになんだかぴかぴか光る物が見えました。一太郎が、恐いのをがまんして見ていると、光り物はだんだん近寄つて来て、

「おぼさりたい、だかさりたい」といいました。光が大きくなると、声も大きくなって、今にも一太郎のすぐそばにやつて来そうになりました。一太郎は、恐くてたまらず、後も見ずにかけだしました。

やつとの思いで家に帰りつくと、一太郎は、光り物が「おぼさりたい、だかさりたい」といつて近づいてきたと話しました。すると、二太郎が、

「そんなら、おれが行つてみよう。おぼさつてきたら、おぶつてくるし、だかさつてきたらだいてきてみせる」といいました。

つぎの日の夕方、二太郎は、何としても正体しょうたいを見とどけてやろうと度胸どけうをすえて出かけて行きました。

山道にかかると、森のかげから、光り物が、のそりのそりと出てきて、

「おぼさりたい、だかさりたい」といいました。二太郎は、恐いのをがまんしていましたが、光り物は、手の届きそうな所までやつて来ました。二太郎は、まさおおになつてふるえながら、家に逃げかえつてしまいました。

つぎの晩、三郎は、

「兄さんたちは度胸がないなあ。こんどはわしがいつて見て来よう」といつて、太い背負いなわを持つて出かけて行きました。

山道にかかると、森のかげから、光り物が出てきて、

「おぼさりたい、だかさりたい」といいました。三郎は、

「おぼさりたかつたら、おぼされ。だかさりたかつたら、だかされ」といつて、背中を向けました、すると、五十貫目(約185キログラム)もある重いものが背中にのしかかつてきておぼさりました。三郎は、そいつをなわで背中にしぼり付けて、家に背負つ

て帰りました。暗い山道も、光り物のおかげで明るくなりました。家の近くまで来て、
三郎は、

「光り物をおぶって来たから戸を開けてくれ」とさげびました。そして、戸口で光り物を下ろそうとしましたが、なかなかはなれません。そこで、台所の柱に、光り物の頭を打ちつけました。ゴウーンと音がしましたが、それでもはなれませんでした。

三郎は、おくの座敷に行つて、大黒柱に力いっぱい打ちつけました。すると、光り物は、さっと背中をはなれて、座敷の畳の上のころげ落ちました。落ちたとたん、そいつはざくざくとくだけで、大判小判、金銀が座敷いっぱいに盛り上がりました。

それからのち、三郎の家は、代々、大金持ちになったということです。

おしまい

村上郁再話

資料『昔話研究2』「八戸地方の昔話」奥南新報